

『新卒1年目』

私の教職人生は、昭和55年4月1日から始まりました。

新採用者として赴任した学校は、海のそばにあり、都市部からは車で3時間弱かかる所でした。13学級（学年2学級及び特殊学級が1つ）という規模で、児童数400人程の、それなりに大きな小学校でした。職員構成は、校長、教頭、教諭（学級担任13名）、担任をしない教諭1名（今でいう教務主任）、養護教諭、事務職員の18名から成っていました。当時は、今のような加配教員はいないのが普通でしたから、当然のことながら学級担任を命ぜられました。3年2組、33名の子どもたちを受け持つことになりました。

「なぜ3年生の担任だったのか？」その理由は、おそらく、低学年の2年間で、子どもたちは、学校で生活していく上で必要な様々な知識やスキルが身に付いているからです。また、新卒教師の話であっても、ある程度は理解できるし、一方では、子どももある程度は伝えたいことを言葉で表現できるからです。要は、子どもたちは、ある程度できあがった状態なので比較的指導しやすい学年という押さえからだと推測しますし、このような判断は、妥当だと思っています。

一方で、「中学年の指導が一番大事だ！」という考え方があります。低学年で身に付けた態度や技能等を上手く活かしつつさらに積み上げていき、高学年になった時に、自信を持ってその発達段階にふさわしい力を発揮できる子どもたちとなるよう育てていかなければならない大事な段階だからです。私もそう思います。ちなみに、1年生ですと、初めての学校生活に適應させるために、様々な基本的生活習慣や学習の仕方等を一つひとつ段階的に、そして着実に身に付けさせていかなければならないので、先の見通しをしっかりと持ち、具体的にきめ細かな指導のイメージを持っていなければなりません。ですから、それなりの経験が求められます。また、高学年は、子どもの発達段階が思春期に移行していくという難しさを踏まえた適切なかわり方が求められますし、加えて他の学年に比べて業務量が多いので、一般的には、新卒の教師には担当させない傾向があります。

さて、「比較的指導しやすい」とは言っても、後は、教師の人間性やセンスも含めた力量次第となります。稚拙な指導理念や6週間の教育実習の経験値だけで何とかなるほど現実には甘くはありません。

ある程度出来上がった状態の子どもたちであっても、学級担任が代われれば、出会ったその日から、新たな学校生活のスタートを切ることになります。子どもは、「今度の学級担任は、どんな先生かな？どんなやり方をするのだろう？」と、教師の在り様を良く見ています。そして、短期間で子どもなりに教師を評価します。

前にも述べましたように、最初の出会いからの三日間で、子どもに良い印象を持たれることは、とても大事なことであり、有効なことなのです。

「良い印象」とは、別に子どもに迎合して人気取りをすることではありません。

「子どもは、人間の本質的な部分を感じ取ることができる」と私は思っています。明るさや誠実さ、公正公平であること、熱意があること、善悪の判断が明確であること等、言葉で上手く表現できなくてもちゃんと感じているのです。

ですから、子どもとの関係が上手くいっているかどうかは、子どもの表情を見るとわかります。教師が話をしている時、子どもの目に真剣さが感じられます。中にはうなずいたり、「そうなんだ」とつぶやいたりしながら聴いています。また、適度な規律性があるので、引きしまった感じがします。そして、明るく生き生きとしています。

さて、私の場合、出だしの4カ月は、低調でした。「どうも上手くいっていない。こんなはずでは・・・」という感覚が続きました。原因ははっきりしていました。授業です。子どもにとって満足度が低い授業だったのです。私は、このことで自信をなくし、自分を責め、悩み続けました（新卒教師が、いきなり良い授業ができるわけがないのに・・・）。そして、様々な面で、子どもたちの姿に良くない様子が徐々に表れてきました。

こんな状態になると、悪循環に陥り、いわゆる「泥沼状態」になります。自分の心身のコンディションにも影響がでてきました。こんな時に「今、あなたの課題は何ですか？」と問われても、「全部です」となります。冷静に現状分析ができないので、優先して解決すべき課題を捉えることができず、何から手をつけていけばいいのかわからなくなってしまいうからです。

3年1組の先輩教師（ベテランでバリバリの方でした）が、「俺の授業、見においで。あなたが見せてくれた場面と同じところをやるから」と言ってくれました。参観したところ、自分の授業とは全然様子が違うのです。子どもたちが、実に生き生きと学習していました。授業者の笑顔と表現力、問いの仕方、授業の山場の作り方等が参考になりました。しかし、正直なところ、この先輩教師の気遣いはとても有り難かったのですが、自分の授業との圧倒的な差に打ちのめされ、さらに自信をなくしてしまいました。弱っている時は、目の前にヒントがあっても、掴みとって実践に生かすことができないのです。

「3年2組、大丈夫か？」と、多くの方が不安を持ち心配されていたであろうと想像しています。でも、有り難いことに、上司も、同僚も、保護者も、ふがいない私を根気強く見守り、支えてくださいました。40代の先輩教師からは、ある時「新卒1年目って、ほんとに大変でつらいんだよな。俺もそうだったから」と、言葉をかけてくれました。「あの先生が、そうだったのか」と、少し気持ちが楽になった記憶があります。若手の先輩教師からは「ご飯食べにおいで」と、よく誘ってくれました。そして、いろんな話をしてくれました（さりげない応援と感じていました）。当時の保護者の気遣いには、本当に感謝しています。若い教師を歓迎し、若い教師を我が子のように見守り、応援し、その成長に喜びを感じる気風が、その地域にはありました。

それらのお陰で、ある時、ブレイクスルーする瞬間が訪れました。実に幸運であったなと思っています。その後も、好不調をくり返しましたが、結局、その学校には7年勤務しました。私はこの学校で、この地域で、「教師として何とかやっていけるかな」という手ごたえをそれなりに持つことができたと思っています。

私は、人と縁に恵まれました。実に有り難いことだったと思っています。